

技術フォーラム'96仙台の開催準備をして

総務財務部会長

斎藤 芳徳

総務財務部会は、フォーラム運営の全体統括を主目的に設置しました。こう言うとか格好良く聞こえますが、その内容は結構多岐に渡っており、全地連との意見調整、実行委員会各部会間の意見調整、全体スケジュールと予算管理、その他各部会に属しない事項の処理と、言わば裏方で縁の下の力持ち的な業務を分担しました。

ただ、どれを取ってもスムーズな運営には欠かせないポイントの業務であり、部会長を引き受けた時点で、少数精鋭、処理能力が高く頭の良い人材を選ぼうと決心し、その結果、薬丸副部会長、比留間、五十嵐の各委員に私を加えた4人で構成しました。私と薬丸副部会長は兎も角、比留間、五十嵐両委員はそれぞれの会社の技術の中心で活躍しており、果たして協力して貰えるかどうか若干不安がありましたが、各支社長には皮肉を混えながらも快諾して頂き、これで仕事の半分は終わったようなものと思っていました。

実質的な部会としての活動は、2月に開催した実行委員会全体会議の企画運営を担

当したところから始まりました。また部会単独の会議以外にフォーラム運営の全体の流れ、各部会の準備状況等を把握してもらうため、企画委員会、全地連との合同会議にも全員に出席してもらいました。この間の部会では、参加者の便宜を考えて厚くて重い講演集と市内周辺の観光案内等を入れる袋を準備して渡そう、シンボルマークを印刷して袋に貼ろう、記念のテレカを作ろう等の今までに無いアイデアが出され、直ちに実行に移されました。最も大変な仕事は、「スタッフマニュアル」の作成でした。比留間委員に担当してもらいましたが、委員、スタッフ全員の行動指針となるもので、全地連の池田氏と何度もやりとりし、この後のフォーラムの規範となる立派なマニュアルが出来上がりました。

予算管理の方は、思ったように上手くはいきませんでした。特別会計として450万円を計上し、理事会、定期総会で承認されました。これでは足りないと言う意見も多かったのですが、最初からあまり大きい予算も組めずにスタートし、結果としては予算をオーバーしてしまいました。色々と明確な理由はあるのですが、この点は心残り

で甘さを反省しています。

アッと言う間の3日間でしたが、若い人の実行力とパワーに驚かされたと共に、良きパートナーとして私を補佐して頂いた部会の皆さんに改めて感謝の意を表します。

技術発表部会長

三 塚 園 彦

準備を進めるに当たって技術発表部会で憂慮されたことは、先ず本フォーラムの主役である発表者が確保できるかどうかでした。

過去6回のそれに遜色無いようにするためには、地元である東北協会から相当数の発表が出る事が期待され、会員の皆様に何度か協力の要請を致しました。

お陰様で全体の発表数は149編と過去最高の114編をかなり上回る事ができましたが、その内の1/3に迫る47編を当協会からの発表が占めていたことが大きな理由です。

これらの発表論文を査読しているときに気がついたのですが、論文の内容やレベルでは無く不注意な誤字・脱字、あるいは意味の解りにくい言い回しが少々有りました。

これは慣れの問題と思いますが、論文原稿作成時に誰かに目を通して貰っていたら殆どが防げた事だと思います。

次に心配されたのは、各セッションの演

出者たる座長団がその区分に応じてうまく決まるかどうかでしたが、これも当協会各社のご協力で各人の専門分野を生かしたかたちで22セッションの座長及び副座長をお願いする事ができました。

さて当日、149編の技術発表が1編も欠けるのはおろか、これといったトラブルも無しに予定通りに終了した事は、なかなかの出来であったといささか自負しております。

ただ、各セッションの終わりに設けられた質疑応答のコーナーが少し活気が足りなく感じられ、本フォーラムが学会レベルの論文発表ではなく、現場と常に接している若い技術者やオペレーターに自由な意見交換の場を提供するという事を目的とするという意味では、もう少し気楽に質疑応答ができるように構成に工夫が必要かなと思っております。

いずれにせよ、まだ余り慣れしていない人が圧倒的であった発表者をはじめ参加者の皆さんには良い経験をされ、今後の仕事の励みになるであろう事を確信しています。

発表者、座長団に加えて裏方に徹してくれました実行委員及びワーキンググループの皆さん、並びにこの方々を支えてくれた会員各社に厚く御礼申し上げます。

講演部会長

和 島 実

講演部会の行事内容は、例年ですと特別講演とテーマ講演の2題の企画・運営を行えば良く、講演部会の担当に決った時は、これは楽勝と心の内でニンマリとほくそ笑んだものでした。しかし第2回企画委員会時に、今回の技術フォーラムで東北独自の特別企画を実施しようという気運が高まり、委員長の方から「当業界にも最近女性技術者の参入が目立ってきたので、“女性技術者の集い”でもどうだろう」という意見が出された。企画委員7名は、常日頃奥方をはじめ、女性社員の方々からイジメにあっていると見え、女性に甘く反対意見は出されなかった。私もまさか担当になるとは思わず積極的に賛成に廻ったが、これが失敗であった。次の瞬間、「それではこの企画は、講演部会で担当願います」との委員長の一声で、私は一瞬目が眩んだ。“口は災いの元”貝に成りたい心境です。講演部会の皆様には、厄介な仕事を引き受けてしまい誠に申し訳なく思っております。

平成8年正月早々から講演部会実行委員の精鋭6名が一堂に会し、女性技術者の将来展望および生きがい等が模索できる集いとすべく鳩首会議を重ねた。まず業界内の女性技術者の実態が全地連でも把握されておらず、アンケート調査を行った。この結果はパネルディスカッション時に報告した

が、回答率が22%と低く我々を慌てさせたが、女性技術者が全国で300名以上は確実に居ることが分かり、また参加予定者が55名と予想以上に多いことにより、我々を勇気づかせもした。

会の運営は女性技術者に自由活発に発言してもらおう事で、パネルディスカッション形式とし、コーディネーター、パネラー計5名をアンケート調査結果を参考にし、会員各社の御協力を得て選出した。全地連からは、この集いが女性差別にならないかと大変気にしていたが、終わってみたら女性のパワーは予想以上に強く、無用の心配事であった。

大会当日の反響は大きかった。参加された各社のオーナーや役員の方を始めとし聴講者は150名位におよび、熱心な討論がなされた。コーディネーター・パネラーの方々は、聴衆に圧倒されず、堂々と自分の考えを発言され、また会場の経営者の発言も活発に行われた。昨今の女性技術者の進出に対する関心が如何に高いかが伺い知れた。この特別企画は、成功裡に終わったが、これもコーディネーター・パネラーの方々を初め、参加された女性技術者全員のパワーによるもので、心より感謝致しております。

行事部会長

辻 光

行事部会は、技術者交流懇親会と見学会が担当でした。懇親会は、技術発表会と共にフォーラムの2大イベントで参加者が楽しみにしている行事ですが、当初400人程度を見込んでいたのですが500人を越えてしまい会場は大賑わいの盛況でした。1年に1回の業界人の集まりということで、お互い何年振りかで会う面々が懐旧談義に花を咲かせ、時を忘れるのがこの懇親会です。懇親会にはアトラクションがつきものですが、出し物として最近どこでも太鼓が流行りのようです。しかし、毎年同じでは興がないと思っていたところ会場のホテルからも、太鼓は遠慮頂きたいとのことで種々検討したのでした。民謡、郷土芸能、日舞等々の案が出ましたが青森の三内丸山遺跡の展示に因んで津軽三味線となりました。これが中々の迫力で好評のようでした。

見学会の予定ルートは、七ヶ宿ダム（ダムサイト及び下流の材木岩、虎岩付近の地質）～ワイナリー工場（山形県高畠）～芋煮会（昼食）～蔵王・刈田岳（火山地質）でしたが当日は生憎の雨。数カ月前から準備に入り七ヶ宿や刈田岳の地質説明資料を作成し、更に下見までしたというのに全く無念の雨でした。おまけに、七ヶ宿から上ノ山に至る国道113号の二井宿峠付近の崖崩れで大型バスは通行止めで、ワイナリー

工場見学は中止ということに。8時の仙台駅集合の頃はドシャ降りでしたが、七ヶ宿に着く頃は霧雨程度で周辺の景観が明瞭に観察できホッとしたもの。ダムサイト決定の経緯、材木岩と虎岩の成因等々の説明をしつつ1時間余り当日唯一の地質巡検となりました。

その後山形へ向かったのですが、県境を越えると時に薄日も射す曇り空でした。昼食の芋煮会は特に遠方からの方々に好評で、3杯もお代わりする人もいて大釜も直ぐ空っぽに。ところで、万が一の為と芋煮会は屋内にセットしたのにここでは雨は降っていないという皮肉さでした。見学会は、定員40人のところ参加希望者が50人を越えてしまい、東北協会や来年度開催の視察に大挙で乗り込んできた中部協会の方々に遠慮願うなどして何とか定員に合わせたのですが、人気の理由は芋煮会とワイナリー工場にあったのかも。

最後のスケジュールは蔵王のお釜付近の火山地質見学でしたが、強風と霧雨とガスでは3m先も見えず寒さに震えつつ早々に退散となりました。九州から参加のある人は、寒さでバスから降りなかったのですが待つ間こんな話をしてくれましたので紹介しましょう。“自分はフォーラムには毎回参加していてどこも悪い印象は無いが、東北は格好に好感がもてた。初日の登録受付では、混雑の中笑顔を絶やさず対応してく

れたし、スタッフの人に何を尋ねても、自分は担当ではないからとタライ回しされることもなく親身に案内や教えてくれたりと、東北人の素朴な暖かさが感じられた。”とのこと。嬉しい話でした。

扱、何も見えない蔵王の地質については車中での資料説明によるしかなかったのですが、濃霧の中、急カーブのエコーラインを下るバスの把手にしがみついては説明を聞くどころではなかったかも知れません。ガイド嬢は、お釜は摩周湖ほどでは無いにしても3回登って1回拝めればいいくらいとか、宮城では雨は吉兆と言われていてそれに因んだ「さんさ時雨」を唄うなどさかんに気を遣ってくれたのでした。

夕方の仙台は相変わらず強い雨が続いていました。新幹線で帰る人を送り、空路の人は連絡バス発着所まで案内して長い1日の予定が漸く終了しました。行事部会のスタッフは3日間の疲れも、雨もものかわ国分町へと打ち上げに繰り出したのでありました。

最後に御苦労いただいた行事部会のスタッフを紹介し御礼と致します。

見学会総括：菅野副部長、行事写真担当：津山委員、七ヶ宿地質解説：三条委員、蔵王地質解説：中村委員。尚、懇親会は全員が案内等を担当しました。

展示部会長

鈴木 楯 夫

展示部会の主な役割は、協会展示と企業展示の2つの催しを準備することでした。協会展示は、東北らしさをアピールするには何が良いかで、企画委員会ではいろいろと協議を重ねましたが、結局、昨年来全国的に大きな話題となって現在も発掘が続いている青森県の縄文遺跡（三内丸山遺跡）に関する資料展示と東北協会の永井理事長の個人コレクションである日本の蝶を展示することとなりました。この結果を受けて、部会としては、早速、青森県三内丸山遺跡対策室を訪れ、出土品と説明パネルの貸し出しをお願いしました。全国的に有名となった遺跡であるだけに各市町村、学会関係からの問い合わせ、借用依頼が多く、我々の協会のために果たして貸し出してもらえるか否か、結論が出るまで、随分と時間がかかり、やきもきしました。しかし、対策室の上野主事の並々ならぬご尽力により、大型板状土偶を初め21点の出土品（精巧なレプリカ、製作費900万円）、19枚のパネルと遺跡発掘状況を記録したビデオテープなどを借用することができ、何とかフォーラムの展示を盛り上げることもできたと思っています。

一方、永井理事長の日本の蝶は、事前に理事長宅にお邪魔して見せていただくという幸運な機会がありましたが、その時見せ

ていただいた蝶のコレクションにその種類の多さ（外国産も含め）と立派さに仰天しました。一つのケースには同一種の蝶が何十頭と収められ、そのようにして収められた各種の蝶のケースが、全貌を知ることにはできませんでしたが、何百箱とあったのではないのでしょうか。

実際にフォーラムに展示された時には、日本の蝶と題して、日本に生息する232種の全ての蝶を雄雌一対で整理し直し、全てに名を付け、コメントをつけてありましたので、展示までに要した永井理事長の努力はいかばかりのものであったかと改めて敬服しました。

もう一つの展示である企業（機器）展示は、会場の関係で、ブース数より応募企業が多かったため、多数の企業の皆様に大変ご迷惑をおかけしてしまいました。この場を借りてお詫びいたします。しかし、盗難、損害などもなく、無事に終了することができましたことは、実行委員、ワーキンググループの皆さんのお陰によるものであり、ここに厚く御礼申し上げます。

事務局長

松 淵 稔 美

平成7年7月の東北地区役員会で、全地連「技術フォーラム」について、広島次の開催地は仙台になる、とのお話があり、

そのための準備として東北地区協会から11名が勉強のため、広島の「技術フォーラム」に出席することにきまり、事務局長もこのメンバーに入るように決定されました。

広島に出発する前日に総務委員長から「早急に会場を探しておくよう」依頼がありましたので、早速会場探しをするために必要事項をあれこれメモ用紙に書いてみましたが、あまり項目を並べたてるとクドくなるので、とりあえず「500人以上の立食宴会のできる部屋1室と、このほか100人以上収容できる会議室として何室提供できるか」にしぼってめぼしいホテルなど7ヶ所に電話を入れてみたところ、うち2ヶ所は、もっと詳しい内容を聞いてから、ご返事するとのことで、残り5ヶ所のうち、立食宴会500人以上収容可能が3ヶ所ありましたが、このほか100人以上収容できる会議室の提供は、2～3部屋が限度ということで、「技術フォーラム」開催の会場としてはふさわしくありませんでした。

ここあたりになって、望ましい会場は案外少ないものであることがわかり、詳しい内容を求められた2ヶ所に望みをたくし、FAXを流したら、すぐ1ヶ所から「対応しかねる」との回答を得て、暗い気持ちで広島に出発しました。

広島に参加して、初めて「技術フォーラム」がどんなものなのか知ることができ、また会場についても、どのような施設が好

ましいのか大変参考となりました。

広島から帰ってから、FAXを流しておいた残り1ヶ所のホテルから「何とかなるようだ」とのことで、総務委員長と一緒に出かけ、会議室などを見せてもらい、予約可能となった。この足でさらにもう1ヶ所駅前のホテルを当てることにし、このホテルに行って会議室などを見せてもらい、予約可能となったので、最終的にこの2ヶ所にしぼって見積などの提出を得て、全地連からも下見をしていただき、平成7年9月21日に駅前のホテルを会場とすることに決定させていただきました。

会場探しについては、当初簡単なことと思っていましたが、実際あたってみると大変なことであると痛感しました。

